

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第5回現代龍馬学会総会・研究発表会 ～現代龍馬学会5周年を迎えて～

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、2009年4月に発足してから、ことしで5周年を迎えた。5月11日には「時代の絆」をテーマにして第5回研究発表会を開き、県内外から150人近い熱心な人たちの参加もあって、盛況のうちに終えることができた。昨年の東日本大震災を契機に、以前にも増して問われるようになつた「人と人との結びつき」をめぐつて、龍馬とその時代に学ぼうとしたのである。あわせて、ジョン万次郎を中心とした長編小説「ジョン・マン」を執筆中の直木賞作家・山本一力さんにお越しを願い、「龍馬と万次郎～21世紀を生きるヒント～」と題して講演をしていただいたことも、学会の発足5周年を印象づけるものとなつた。

作家・山本一力さん大いに語る
「龍馬と万次郎」

土佐人と“いちびり精神”
～21世紀を生きるヒント～

山本一力さんは、現在連載20本を持ち、執筆と同時に国内外を取材旅行する「時の人」である。そんな忙の中での講演。学会員はもちろん、一般参加者も多く、会場は気持ちの良い緊張感があふれた。

「皆さんとこうしてこの空間の中で一緒にして、話をさせてもらえるというのは本当にありがたい」。そう切り出した山本さんは、自身の体験を交えて、執筆中の龍馬やジョンマンへの思いを語った。

一部をご紹介する。

生まれ持つた「星の強さ」
龍馬が黒船に出会ったこと、万次郎が出くわした様々なこと。それが歴史を作ってきた。つまり、その場に居合わせることが出来るかどうかという、その人間が持つて生まれた「星の強さ」が歴史に関わっています。龍馬が黒船に出て生まされたことは、その人間が持つて生まれた「星の強さ」です。私が龍馬に一番強く思うのは、その功績よりも、気を味わつた。そういう経験、いろ

黒船が江戸に入ってきたときに、そこに居合わせることができた「星の強さ」です。中濱万次郎、ジョンマ

ンも全く同じです。

今、龍馬記念館で特別展示してお

かれています。私はその絵をもとにボストンを歩き、現場に立つた。す

るとあのボストンという港がなぜ栄えたか、よく分かつた。深い入り江と、

ものすごく深い海。大型船も楽に入

ることができる。そういう港を、生

まれて初めて見た万次郎の気持ちを

考えます。

ボストンを歩き、現場に立つた。す

るとあのボストンという港がなぜ栄

えたか、よく分かつた。深い入り江と、

ものすごく深い海。大型船も楽に入

ることができる。そういう港を、生

まれて初めて見た万次郎の気持ちを

考えます。

ボストンを歩き、現場に立つた。す

るとあのボストンという港がなぜ栄

えたか、よく分かつた。深い入り江と、

ものすごく深い海。大型船も楽に入

ことができる。そういう港を、生

まれて初めて見た万次郎の気持ちを

考えます。

ボストンを歩き、現場に立つた。す

るとあのボストンという港がなぜ栄

えたか、よく分かつた。深い入り江と、

ものすごく深い海。大型船も楽に入

ができる。そういう港を、生

まれて初めて見た万次郎の気持ちを

考えます。

現代龍馬学会は5周年を迎えた。5月11日、150人という最多の参加者とともに、節目である記念の総会及び研究発表会が開催された。

総会では、片岡雅文会長のあいさつ、森健志郎事務局長より24年度事業報告、決算報告、監査報告が行われ、会員の承認を得た。

25年度は、記念館機関紙「飛騰」学会紙面(4ページ)の活用と月例会の充実を図り、会員同士のつながりを深めていく。昨年に続き、会員拡充が今後の課題であり、事業内容の再検討や工夫を重ねることなどを確認した。

来賓あいさつとして、高知県教育長・中澤卓史氏が市井の方が龍馬を研究し続けることは、龍馬を顕彰し

年4回発行)の活用と月例会の充実を図り、会員同士のつながりを深めていく。昨年に続き、会員拡充が今後の課題であり、事業内容の再検討や工夫を重ねることなどを確認した。

強い意志を受け継いで、この高知から日本に、世界に向けて、新しい風を送り続ける」と開会あいさつ。馬甚句」にも大きな拍手が起つた。発表は年々充実しておらず、講師で作家の山本一力氏を囲んでの懇親交流会も、今まで以上の盛り上がりを見せた。

研鑽の場だと思ふ。志をもつて生きていくというのは子どもたちへの教育の基本だ」とエールを送った。

また、学会顧問で郷土坂本家九代目・坂本登氏(東京在住)は、「龍馬の卓越した発想力、情熱、行動力、強い意志を受け継いで、この高知から日本に、世界に向けて、新しい風を送り続ける」と開会あいさつ。馬甚句」にも大きな拍手が起つた。発表は年々充実しておらず、講師で作家の山本一力氏を囲んでの懇親交流会も、今まで以上の盛り上がりを見せた。

松原和廣氏が「学会は自己研鑽の場だと思ふ。志をもつて生きていくというのは子どもたちへの教育の基本だ」とエールを送った。

昨年に続き、会員拡充が今後の課題であり、事業内容の再検討や工夫を重ねることなどを確認した。

来賓あいさつとして、高知県教育長・中澤卓史氏が市井の方が龍馬を研究し続けることは、龍馬を顕彰し

⑤ 右近 浩幸 氏 「龍馬は神戸で何を学んだか ～神戸海軍操練所に学んだ海援隊の運営手法～」



武術の修行は単に戦の技術の取得のみではなく、物事の考え方にも影響を与える。坂本龍馬に縁があった者達がどのような流派を

地元神戸からの考察を
～神戸海軍操練所に学んだ海援隊の運営手法～

関する史料は非常に少なく、どのような組織であったかさえ明確にはなっていない。数少ない史料を調べていくと、神戸海軍操練所の運営内容は、龍馬に多大な影響を与えていたことが分かる。後に龍馬自ら運営を行った龜山社、海援隊は、神戸海軍操練所で得た知識が基礎となっていたことを考察した。

⑥ 窪内 隆起 氏 「司馬遼太郎のこと」



担当記者が語った
司馬「千夜一夜」
作家・司馬遼太郎最初の新聞連載「竜馬がゆく」この大成功により一躍人気作家となつた司馬さんは、当

時、新聞雑誌に連載17本、「坂の上の雲」の時に11本とまさに超人的な活躍であった。人間・司馬遼太郎のやさしさ、ユーモラスなエピソードなど時間の限り語つた。

修行したのかを考察した。北辰一刀流、小野派一刀流(中西派)、直心影流、神道無念流、大石神影流など、幕末に活躍した人物が修行した流派の特徴を述べた。これらの流派を学んだ人たちが幕末の動乱期に活躍したのは剣術修行と無関係ではない。史料を調べていくと、神戸海軍操練所の運営内容は、龍馬に多大な影響を与えていたことが分かる。後に龍馬自ら運営を行った龜山社、海援隊は、神戸海軍操練所で得た知識が基礎となっていたことを考察した。

慎太郎の本当の思いとは
慎太郎の政治思想は、「時勢論」の文言を引用して、「武力討幕」であると捉えられている。だがその後に書かれた「窃ニ示知己論」「愚論窃カニ知己ノ人ニ示ス」「時勢論」

と併せて読むと、その評価が当たらないことがわかる。これら4つの論議は、幕末期の日本の政治状況および海外情報を冷静に分析し、日本が独立国家として、欧米諸国と対等に交際するためには必要な事柄について述べた。

② 森本 邦生 氏 「同じ時代を生きた者達の剣」



剣術の実演映像を交えリアルに

修業したのかを考察した。北辰一刀流、小野派一刀流(中西派)、直心影流、神道無念流、大石神影流など、幕末に活躍した人物が修行した流派の特徴を述べた。これらの流派を学んだ人たちが幕末の動乱期に活躍したのは剣術修行と無関係ではない。史料を調べていくと、神戸海軍操練所の運営内容は、龍馬に多大な影響を与えていたことが分かる。後に龍馬自ら運営を行った龜山社、海援隊は、神戸海軍操練所で得た知識が基礎となっていたことを考察した。

④ 豊田 満広 氏 「中岡慎太郎の思想について～「時勢論」を中心に～」



慎太郎の政治思想は、「時勢論」の文言を引用して、「武力討幕」であると捉えられている。だがその後に書かれた「窃ニ示知己論」「愚論窃カニ知己ノ人ニ示ス」「時勢論」

と併せて読むと、その評価が当たらないことがわかる。これら4つの論議は、幕末期の日本の政治状況および海外情報を冷静に分析し、日本が独立国家として、欧米諸国と対等に交際するためには必要な事柄について述べた。



語られることが少なかった
二人を紹介

お龍さんの生涯を、龍馬との出会い、寺田屋事件、霧島への新婚旅行をなぞりつつ、龍

馬の死後の晩年を中心にお察した。高知坂本家の様子、西郷を訪ねた時、坂本直を訪ねた時、料亭・家中家の様子、戸籍について等、多数のエビソードを新聞・雑誌記事を中心紹介。軽妙な語り口で

① 前田 由紀枝 氏 「龍馬を守ってきた男たち～坂本弥太郎と弘松磯之助～」



お龍さんの生涯を、龍馬との出会い、寺田屋事件、霧島への新婚旅行をなぞりつつ、龍

馬の死後の晩年を中心にお察した。高知坂本家の様子、西郷を訪ねた時、坂本直を訪ねた時、料亭・家中家の様子、戸籍について等、多数のエビソードを新聞・雑誌記事を中心紹介。軽妙な語り口で

③ 岩崎 義郎 氏 「お龍さんの生涯(晩年を中心)」



馬の死後の晩年を中心にお察した。高知坂本家の様子、西郷を訪ねた時、坂本直を訪ねた時、料亭・家中家の様子、戸籍について等、多数のエビソードを新聞・雑誌記事を中心紹介。軽妙な語り口で

馬の死後の晩年を中心にお察した。高知坂本家の様子、西郷を訪ねた時、坂本直を訪ねた時、料亭・家中家の様子、戸籍について等、多数のエビソードを新聞・雑誌記事を中心紹介。軽妙な語り口で

さまざまな視点の発表に会場沸く 第5回 高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表



宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、二〇〇九年四月の発足から五周年を迎え、県内外から百四十六人が参加して第五回研究発表会を開いた。テーマは「時代の絆」。一昨年の東日本大震災以来、社会のあり方が問いつめられようとしているとき、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。直木賞作家の山本一力さんをお招きして二十一世紀を生きるヒントについて記念講演をいただき、県内外の六人の研究家が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。わが国は近年、アジア諸国との緊張が高まり、国内では改憲論議が盛んになつていて、このようなときこそ、私たちは龍馬らの生きた激動と変革の時代に学び、誤りのない道を一步歩んでいきたいと思う。

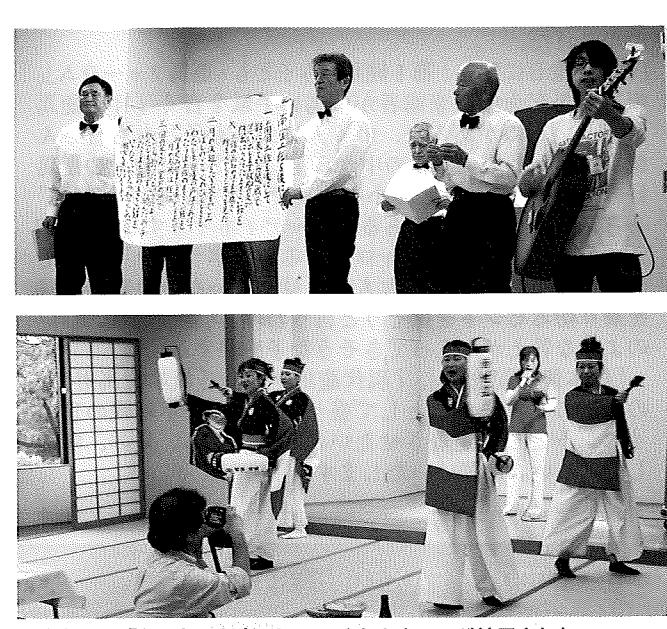
平成二十五年五月十一日
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



高知県教育長
中澤 卓史 氏

高知市教育長
松原 和廣 氏

郷士坂本家九代目
坂本 登 氏

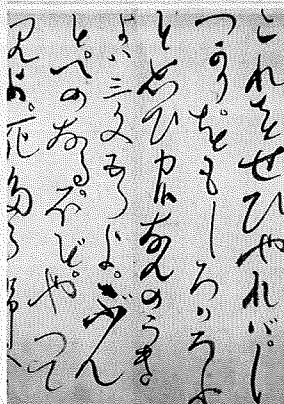


3・龍馬記念館だより

何の浮世は三文五厘

宮川 穎一

龍馬の手紙を読んでいると何げない文言に「?」となることがある。当時は普通に使われていた表現が現ではどういう意味か分からなくなつた場合だ。たとえば「なんのうきよハ三文五厘よ。ぶんと屁のなるはどやつて見よ。死んだら野辺の骨は白石」（文久三年六月二十九日付乙女あて）という表現である。姉の乙女に全国無錢行脚の方法を伝授する場面に現れる文言が妙な表現だ。姉に出来巡礼を勧めてかかれているのだが、なんとなく軽妙ないまわしだと感じる。井口村刃傷事件での中平忠次郎の描写だ。「浮世三分」とは「この世に執着がない様子」と註釈されていいる（林原純正註）。京都国立博物館蔵重文



文久三年六月二十九日の坂本龍馬の手紙（部分）乙女あて
京都国立博物館蔵 重文

一著『独立自尊』。福沢諭吉と坂本龍馬が同じ表現を使つたことは興深いが、二人は天保五、六年生まれの同世代人なので当然である。当時の流行語だたのだろう。福沢の「浮世三分五厘」の方が一般的な表現だったようで、辞典的では「この世のことは、それほどねうちのあるものはないの意」と記される。その表現の先には「なので」で、そこには「なの」で、そ深刻に考えずに思い切れと続くのがパターンなのである。「見るまえに飛べ」龍馬は慶応二年十二月の乙女あての手紙で、「面白いものだ」と書いてかかれている。そこにも「何の浮世三文五厘」と同様の死生観はいばだ天四かで

コラム・龍馬のこと

「龍馬は今も生きている」

森澤 正典

今年も「現代龍馬学会総会」の終了後の懇親会で、私たち「おんちゃん合唱団」は「龍馬は今も生きている」を歌わせていただいた。この歌は、約40年前に流行した歌である。私が30代の頃のことだ。歌って歌って歌い抜いた歌である。ところが、その後、40代50代と年を重ねるごとに、いつしか誰も歌わなくなつた。皆、忙しかったのだ。

そして60代を迎えた。年老いてゆく自分に不安を感じる年代になった。そんな時に、段々と元気を失ってゆく自分自身を励ましたいと立ち上がった「おんちゃん」がいた。のちに「おんちゃん合唱団」の団長となるOさんである。自分を励ます歌は、昔に燃えて歌っていた「龍馬は今も生きている」と考える。「龍馬は今も生きている、若い俺らの燃える血に」の歌詞を歌う時、五体に元気が注入される事に気づく。もしも千人で歌えば、千人が元気になる。そう確信した彼は「シキデン」など有名レコード店を探し廻る。でも、どうしても見つけることができない。

Oさんが「龍馬合唱団」の存在を突き止めたのは、一年後のことであった。ピアノの演奏で歌っている彼等の「龍馬は今も」のテープを大量に複製すると、Oさんは知り合いにばらまいた。賛同者が増え始め、20数名のおんちゃん達が名乗りを上げた。徐々に活動の場が広がっていった。

そして、平成23年5月28日に開催された現代龍馬学会の懇親会で17名の「おんちゃん」が合唱できたのである。五体に元気がみなぎっていく。あの時の感動は今も忘れない。私は今後も「龍馬は今も生きている」を歌い続けていきたいと思う。「龍馬は今も生きている、若い俺らの燃える血に」と。

“話してみるかよ”

戦争・平和・龍馬を考える

森 健志郎

今年の梅雨のように混乱の頭の中で実は考えていることがある。それが考えるほどに思いが熱くなってきて、今や消えることがなくなった。逆にますます、鮮明になってきた。是非とも聞いてほしい。

今年の8月15日(木)はそう、お盆の終わり、「終戦記念日」である。これまで気にしないことはなかったが、今年は、いつもの年よりなぜか余計に「忘れたらいかんぞ！」そんな発信信号が心に響いてきた。それだけ世の中が騒々しいというのは間違いない。ヒステリックなマスコミ報道がその証明だと思う。それに先日、広島へ行く機会があつて原爆ドームやら平和公園を見たのも刺激になったようだ。「戦争はいかん」と改めて自分に言い聞かせた。龍馬の思いがそれにダブつた。“龍馬記念館からそのことを発信するアイデアはないか？” 考えた時、ひらめいたのがこれだ。

「終戦記念日に誓う！第1回夏休み子ども・龍馬フォーラム」。坂本龍馬記念館に来館者が龍馬に手紙を書く「拝啓龍馬殿」というのがあるが、書く人は大人も子どもも皆さん龍馬に熱い。その手紙の中から10人、さらに地元の龍馬好きを選び15人ほどの小中学生で“平和、戦争、龍馬”を考えるフォーラムである。コーディネイトするのは、3人の学芸員と館長、フォローするのはボランティア。その熱い論議の中から、大人には見えていない混乱の現代を乗り切るヒントを探そうと言うわけ。何か“原点に返る”のような答えがかえってきそうな予感がする。

「坂本龍馬記念館」、「現代龍馬学会」、「坂本龍馬財団」の合同のフォーラムとして盛り上げて、毎年終戦の日のイベントとして定着させたいと考えている。是非、参加してほしい。お願ひいたします。